学苑　昭和女子大学紀要　No. 977　28～57（2024・12）

〔資　　料〕

シンポジウム『スペイン語教育における高大接続の現状と未来』における座談会記録

小倉麻由子・高畠　理恵・藤田　　護・ガルシア，カルメン・
プリエト，マリア　ベロニカ

Record of the Round Table Held during the Symposium "The Actual Situation and Future of Spanish Education: Continuity between High School and University"

OGURA Mayuko, TAKABATAKE Rie, FUJITA Mamoru,
GARCÍA Carmen and PRIETO María Verónica

The subject of the discussion was the actual situation and future of the Spanish language in the Japanese school system, from elementary school to university. It is necessary to create a more effective and solid connection throughout the educational system so that teachers can provide a more unified vision of Spanish-language education, and thus improve the plurilingual and pluricultural competence of the students, skills which will allow students to succeed in a multilingual society.

Key words: intercultural capability（異文化能力）, multicultural society（多文化 共生社会）, plurilingual and pluricultural competence（複言語・複文化能力）, connectivity in the Spanish education between high school and university（スペイン語における高大接続）

はじめに

2024 年 3 月 3 日に，昭和女子大学国際学部国際学科主催，慶應 SFC（慶應義塾大学 湘南藤沢キャンパス，以後「慶應 SFC」または「SFC」）スペイン語・スペイン語圏研究室，清泉女子大学スペイン語・スペイン語文学科共催によるシンポジウム『スペイン語教育における高大接続の現状と未来』が昭和女子大学オーロラホールで開催された。このシンポジウムの中心メンバーは，2021 年度に基盤研究（c）（JP21K00791）で日本学術振興会の科研費助成事業に採択された『多言語多文化社会構築に向けた高大接続のスペイン語教育』に携わるメンバーであり，科研費助成事業の一環として，研究代表者の本務校である昭和女子大学国際学科の学科プロジェクト予算を受けて開催したシンポジウムである。

2014 年に行われた中央教育審議会答申による「高大接続」改革とは，「高等学校教育，大学教育及びそれらを接続する大学入学者選抜の抜本的な改革」であり，それ以前までの小，中，高，大という段階ごとに異なる教育システムを，「小・中学校段階で身につけた教育成果を，高等学校，大学で確実に発展させるべく，つながりを持った教育システムにしていく」（小倉 2020，p. 193）ことである。しかし，高大接続によって，高校生が大学の授業に参加できる科目等履修生などのプログラムがようやく広まり始めたところで，現時点ではスペイン語だけにとどまらず，高大接続全体において課題が

山積している。これについて，文部科学省も，さらなる教育機関を超えた教員間の相互理解の必要性について提言している[1]。

世界人口の約 6.2%（Instituto Cervantes 2023, p.1）に相当する話者人口を誇るスペイン語は，現在も日本の大学入学共通テストの外国語科目には含まれておらず，すでに含まれているドイツ語やフランス語とは一線を画している状況である。2009 年の「高等学校学習指導要領」で，それまではこの 2 言語のみが外国語として示されていた状況から，ようやく幅広く柔軟に開設できるようになったことが示されたことで，スペイン語も少しずつ開設されるようになってきたが（泉水 2009，p. 46；小倉 2020，p. 196），まだまだ中等教育機関での歴史が浅い言語であり，その結果，高大接続という観点からの調査研究は手薄な状態である。

スペイン語での高大接続の意義としては，大学改革や新指導要領策定時に強調された「グローバル人材育成」の点で，外国語教育の重要性が，小，中，高，大を通じて求められており，これまでの知識集約型の学習スタイルから，より言語を使って何かができるようになることが求められるようになったことで，フィールドワークなどの研究生活においても使用でき，さらに今後の多文化共生社会においても必要となるコミュニケーション力を高めることは，資質・能力の育成に直結することになることから，スペイン語を含む外国語教育における高大接続の意義は高い。さらに，言語ごとに背景も異なるため，「スペイン語」に特化して研究を行う意義は高い。

このことから，現在の学生・生徒たちが今後のグローバル社会を生きぬくためにも，また，日本に在住する日系人やラテンアメリカからの定住者との多文化共生社会を構築するためにも，スペイン語教育の質の改善という重要課題に取り組む目的で，本シンポジウムを通じて，小学校，中学校，高校と大学でスペイン語教育に携わる教育者の声を聞き，さらに学習者たちのスペイン語学習に対する考えを把握することで，どのようなカリキュラム・デザインが求められ，それに対する教材作成や指導方法などが必要となるかを検証するとともに，さまざまな教育機関でスペイン語教育に関わる教員たちの横のつながりを活性化することで知見を広め合い，協力・連携を可能とするための土台づくりをすることを目指した。

本稿では添付資料 1，2 として，本シンポジウムのポスターおよびプログラム・発表要旨を掲載し，当日の発表内容を示すとともに，当日行われた座談会の記録を載せ，シンポジウムで得られた知見について報告する。

1. シンポジウム開催の意義

すでに述べたように，今回のシンポジウムは，グローバル化が進み，多文化共生社会が構築されていく中で高まるスペイン語学習の需要に応えるため，スペイン語教育の質の改善に一石を投じるべく開催された。今後ますます各教育機関間のシームレスなつながりが求められる中，多くの場合で初めてスペイン語に触れる高校生への学習に対するハードルを下げ，意義ある学習を可能にし，スペイン語学習の継続に向けた動機づけを行っている例（日比野，廣瀬，高畠・小倉），を提示すると同時に，日比野，廣瀬の発表ではカリキュラム案や教材の不足などの問題も挙げられ，教員たちが孤独にゼロから奮闘している様子が伝えられた。

また，若年層におけるスペイン語学習推進事業の一例として，清泉女子大学の齋藤・駒井からは，同大学が主催する高校生向けのスペイン語スピーチコンテストの事例について報告があり，参加者た

ちがどのような思いでスペイン語学習に向き合っているかなどについて，コンテスト開催を通じて得られた知見について共有された。

さらにネイティブ教員たちからは，異なる教育機関に従事するスペイン語教育者の実態を知ることを目的として行われたアンケート結果の報告（García, Prieto）や，中等教育機関でスペイン語を教えるネイティブ教員の抱える課題についての報告（Brazhnikova）があり，スペイン語の授業が開設されてはいても，授業内容に関する学校機関からの指示がなく，さらに学習指導要領の英訳版は縮小版であり，英語に特化しているものであるため，どのような授業を設計していくべきかがほとんど理解できないような状況の中で，常に不安な状態で授業運営を行っているネイティブ教員たちの奮闘ぶりや，非常勤講師として5年で雇い止めされるといった雇用慣行による不安を感じながら教育にあたる姿を垣間見ることができた。

さらに，文部科学省が目指す高大接続改革の一環として，各教育機関（小学校，中学校，高校，大学）間におけるシームレスな教育システムにしていく必要があるという観点から，光塩女子学院初等科におけるスペイン語を通じた複言語教育についての報告（茂木，西村，齊藤）を受け，小学生時代に身につけた知識や技能を高校や大学でどのように発展できるようにすべきかを，高校や大学でスペイン語教育にあたる教員たちが知っておく必要があることを再確認した。

座談会の前には，本シンポジウム参加メンバーが主体となって発足した高校でスペイン語を教える教員たちの会についても報告があった。これにより，直接的な関与はないが，本シンポジウムでも目的としていたスペイン語に携わる高校教員の横のつながりを保つための「高校スペイン語教師の交流会」が立ち上がったこと（添付資料2，p. 56参照）で，今後このような会との連携によって，文部科学省も提言している高校教員や大学教員たちの相互の現状理解不足についても改善できるようになる。

このようなことを受け，最後にまとめとして，高校教員と小学校教員，大学教員が一堂に会してスペイン語教育の現状について話をし，今後の高大接続の促進の第一歩となるための機会とした。

2. 座談会の意義

座談会では，各登壇者の意見と，継続的なスペイン語教育の実践における人材面ならびに制度面での課題，継続してスペイン語を学ぶことの意義について語ることで，それぞれの立場（小・中・高・大）からの意見を得ることができた。

スペイン語の授業が開設されている高校数は，2016年の文部科学省のデータによると109校となっており，ドイツ語に次ぐ5位であったが，2023年のデータでは89校で開設されていることが報告されていて，ドイツ語を追い越して4位となっている。一方，同じ年に一般社団法人 日本外国語教育推進機構（JACTFL，以後「JACTFL」）が実施した調査では，ドイツ語が計134校で4位，スペイン語はそれに次ぐ5位の98校で開設されていることが報告されている。その中で連絡先の判明した93校に対して本シンポジウム主催メンバーにてアンケート調査を実施し，35校のスペイン語教員から回答が得られた。この結果はホンシンポジウムにてGarcía, Prietoによって報告されている（添付資料2，p. 51参照）。また，本シンポジウムの参加者のほとんどがこのアンケートに協力してくれた教員であり，座談会参加メンバーの一部もその中から協力を申し出てくれた教員である。

以下は座談会の記録である。本記録を通して，それぞれの実践状況や経験を知ることで，それぞれの機関に属する教員たちにとり，学習者たちが培ってきたスペイン語力を伸ばすカリキュラムを設定

するための資源となる。また，スペイン語教育に直接携わらない教員にも，スペイン語教育の世界でどのような活動が行われているか，現状を把握してもらうための良い機会となると考える。そのため，本記録は，発表者の言葉をできる限り正確に伝えられるよう，できるだけそのままの表現で残し，さらに読者が文脈を理解しやすくすることを目的として内容が変わらない程度に編集した。

3. シンポジウムにおける座談会記録

登壇者：大森洋子（明治学院大学教養教育センター教授），各務恭子（兵庫県立国際高等学校非常勤講師），蛯原帆奈海（関東国際高等学校教員），茂木俊浩（光塩女子学院初等科教諭），西村亜希子（立教大学教育講師），齊藤友理（慶應義塾湘南藤沢高等部非常勤講師），三浦彩貴（慶應義塾大学環境情報学部学生），小倉麻由子（昭和女子大学国際学部国際学科特命講師）

司会：藤田護（慶應義塾大学環境情報学部専任講師スペイン語・スペイン語研究室コーディネーター）

※なお，各登壇者の勤務経験のある教育機関名をわかりやすくするため，名前の後ろに小学校は（小），高校は（高），大学は（大），学生は（学生）と記載する。

3.1 それぞれの立場からの意見

藤田（大） …よろしくお願いします。まずは学生の声から始めます。慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス環境情報学部２年生の三浦彩貴さんに経験を語ってもらいます。三浦さん，よろしくお願いします。

三浦（学生） ご紹介いただいた，慶應義塾大学環境情報学部２年の三浦彩貴です。高等部のときからスペイン語を学んでいることについて話をさせていただきます。高校２年生と３年生に当たる５年と６年の高等部のときに，週２コマの授業でスペイン語を勉強していました。教科書は，ヨーロッパの人が第２外国語として学ぶスペイン語の教科書でした。文法など難しいところは，プラスアルファで宿題のプリントをたくさん出してもらう形で勉強していました。

大学になってからは，一番下のクラスを飛ばしてテストを受けて実力を判断し，上のクラスから始めさせてもらっていました。一つ上のクラスなので最初は少し不安もありましたが，（高校の時と）同じ先生もいるので授業の進め方やプリントの雰囲気もとても似ていて，不安なく勉強できました。特に，単語や動詞の活用は２年間ゆっくりと基礎を固めていたことがアドバンテージになっていたので，他の人よりも少し楽に勉強できたのではないかと思っています。このような感じです。

藤田（大） 高校から大学に進む段階で，逆に難しく，ハードルを感じたことは何かありましたか。

三浦（学生） 他の人は一番下のクラスから順番に上がってきますが，私は途中から入るので，周りは知り合いになっている中に飛び込んでいくことは，若干ハードルだったかもしれません。

藤田（大） 初習外国語でも，コミュニティーができている中に１人で入って行き，新しく関係をつくっていくことは難しいですね。三浦さんから他の学生たちに対しても何か一言，メッセージや体験，または教訓はありますか。

三浦（学生） 動詞の活用は，根気強く学ぶしかありません。とにかく時間をかけ，何度も反復しました。

藤田（大） ありがとうございます。今の言葉は，教員が言ってもなかなか説得力がないので，学生に言ってもらえると大変ありがたいです。ありがとうございました。次は各務恭子先生にマイクを回

していただきます。高校の側から見て，ご自身の経験と大学に向かって何を望むかということについて，3分間ほどお話しください。よろしくお願いします。

各務（高） 高校での専門的なスペイン語教育というテーマでよろしいですか。

藤田（大） ぜひご自身の経験を踏まえていただきながら，大学に向かって何がという感じでお話しください。

各務（高） テーマでとても悩んだので，テーマに沿った話ができるかどうか分かりません。あらためて，先ほども話をした各務恭子です。私が行っている毎回の授業が専門的であるかどうかは分かりませんが，『高校での専門的なスペイン語教育』というテーマで話をします。

高校の1年間，あるいは2年間で，スペイン語を習得することは不可能だと思います。スペイン語に興味を持ち，スペイン語を学ぶことが楽しいと思ってもらえて，大学やその後の進路先で，もう少しスペイン語を続けてみようと思ってもらえるような授業ができればと考えています。

実際に行っている授業について話をします。テキストにある文法や基本文法を覚え，応用できるように，テキストの説明の後にテキスト内の短い文をいくつかプリントにして配布しています。そのカードを作り，グループで覚えます。また，自分たちで単語を替えて新しい文を作り，黒板に書いて応用できるようにしています。

また，履修2年目の授業では，スペインへの旅行を想定した会話テキストを用いています。ホテルを探す，列車の予約，レストランでの注文などの会話文をペアやグループで完全に覚えて演じてもらいます。生徒たちは，初めのうちは難しいと感じるようですが，ストーリーが展開されるのでスムーズに頭に入っていくようです。また，学校側からこのクラスでは，スペイン語という語学よりもスペイン中南米の文化，習慣を中心とした授業をしてほしいということで，スペインや中南米に旅行に行った想定で，数人が1グループとなって旅行計画を立てるといった授業もしています。発表はパワーポイントで行い，各自レポートを提出しています。どの授業でも行っていますが，スペイン，中南米を紹介したDVDや，時間に余裕があるときはスペイン語の映画を鑑賞しています。

また，今年もある高校では，実際にフラメンコ衣装を着てみました。生徒たちはスマートフォンで写真を撮り合って盛り上がっていました。他にも，今は新型コロナウイルス感染症のため中断していますが，調理実習も毎年行っていました。パエジャやワカモレ（アボカドのペースト），タルタ・デ・アルメンドラ（アーモンドケーキ）などを作っていましたが，生徒たちは調理実習をとても楽しみにしているようです。高校なので定期考査があるため，授業自体はきちんと進めなければいけませんが，少しでも興味を持ってもらえるように，毎回模索しながら授業を進めています。

藤田（大） 各務先生の話は，高校の2年間でスペイン語を習得することは難しいが，その状況の中で何ができるかというお話でした。これは，大学の学部教育でも共有している課題ではないでしょうか。続いて，隣にいらっしゃる蛯原帆奈海先生，よろしくお願いします。

蛯原（高） よろしくお願いします。渋谷区初台にある，関東国際高等学校教員の蛯原帆奈海です。私が現在勤務している関東国際高等学校では，スペイン語の授業が週5コマあります。もともと関東国際高校では，中国語・韓国語・インドネシア語などを第2外国語ではなく専攻語として学んでいます。スペイン語は，2023年4月から新しくオープンしたコースです。1期生は37名が入学しました。そのうち10名が男子生徒なので女子生徒が少し多いですが，毎日楽しくやっています。

どのような生徒がいるかというと，入学時の9教科内申が27と，オール3前後の学力レベルです。

英語に関しても，英検３級を所持していない生徒がほとんどです。スペイン語に関しても，触れてきた生徒は全くいないところからのスタートです。祖父母がフィリピンルーツの生徒は数名いますが，家庭ではほとんど使用していない，本当にゼロベースからのスペイン語のスタートでした。個人的な話をすると，私自身もほんの１年ほど前はそちら側に座っていたような学部生だったので，生徒もスペイン語１年生，私も教員１年生で，この１年間は手探りでやってきました。

具体的にどのような勉強をしているかというと，週５コマのうち日本人教員が３コマを担当していて，文法など細かいことを教えています。スペイン出身の女性の先生が２コマを担当し，主にコミュニケーション，表現の授業を行っています。教科書は朝日出版社の『Muy bien!』を使用しています。ただ，ほとんど英語も話せない生徒が多い学校なので，『Muy bien!』をご存じの方はお分かりかもしれませんが，あれだけフルカラーで写真もたくさんある教科書を使っていても，文法の話や活用の話をしていると，目がとろんとしていきます。週５コマあれば，１年生のうちにスペイン語検定６級ぐらいは取得できると思っていましたが，そのようなことはありませんでした。スペイン語を通じてスペイン語圏の世界の豊かさや，外国語を勉強することで，生徒が人間的にどのように成長していくことができるかということを大切にしながら授業を組んでいます。

専攻語なので文法もしっかり勉強しますが，毎回の授業で歌を扱っています。ちょうど１月と２月に教科書の中で，*me*・*te*・*lo*・*la* といった目的代名詞が出てきたのですが，「なぜスペイン語はこのような面倒くさいことばかりあるのか」と言ってきた生徒がいました。私は，難しいよね，面倒くさいよねと共感しつつ，新しい歌を導入しました。TikTok で『猫ミーム』[2] という動画がはやっているのをご存じですか。学生の方はご存じの方がいると思いますが，インターネット上ではやっている動画に，チリの歌でサビ部分が特徴的なスペイン語の歌が使用されています。その歌を授業で使い，何と言っているか聞き取るように言いました。「*casa*（家）と聞こえた」と言うので何の意味かと私が聞くと「家」だとか，他にも「*tengo* と聞こえた」ということで *tener*（持つ）動詞の活用形を復習しました。その中で，ちょうど目的代名詞が出てきていたので，歌詞カードを配布し，こう言った場面で目的語は使用するのだと確認する活動を行いました。週５コマあるので，このように専攻語のスペイン語を通じて，楽しみながら自分の世界を広げていこうという授業を行っています。

藤田（大） ありがとうございます。きょうは，高校・小学校・大学といろいろな立場を兼ねている先生もいらっしゃいます。次に齊藤友理先生からお願いします。

齊藤（小・中・高） よろしくお願いします。先ほどは小学校のことで発表しましたが，現在は非常勤で慶應義塾湘南藤沢高等部の２年生と３年生を担当しています。小学校と高校に名前が載っていたので両方のことを話す予定でしたが，高等部では私が勤務する前から継続して使用していた教材やプリントを使っているので，私が専門的にやっているものではありません。午前中に発表されたお二人の話を聞いて，同じような話はできないとどきどきしましたが，この場では私の目線で話をさせていただきます。

割とどの学校もそうだと思いますが，高校生においては，いくつかある第２外国語の中から自分が好きなものを一つ選んで履修する形が多いと思います。先ほどの高畠先生と小倉先生の発表で，高校生向けにアンケートをとったという話がありましたが，そのアンケート結果をエクセルに打ち込むときに関わらせていただきました。私はきちんと数を集計していないので体感なのですが，高校生がスペイン語を選んだ理由としては，発音が簡単だと聞いたという理由が多いと感じました。

最初はそれを見たときに，すごく熱心な動機に感じなかったので，あまりポジティブに捉えることができませんでしたが，よく考えると，とてもポジティブな選択理由とも考えられます。発音しやすいというのは，外国語を学ぶに当たり，苦手意識が少なくなる状態で始めることができます。いろいろな外国語がある中で，スペイン語を選んでもらうことがすごく大事だと思っています。選んでもらわなければ，高大接続といった，盛り上げて頑張っていきたいところには立てません。スペイン語の一つの良さとして捉えられる要素の一つとして発音が簡単ということは，すごく良いことだと思いました。先ほどのお二人の発表を聞いて，結果として発音がしやすいし勉強しやすい言語なので続けたいということが，私としては，高校でスペイン語を行う意義の一つではないかと感じています。

藤田（大） ありがとうございました。高等部では，われわれ自身が労働条件の不安定性という先ほどの Violetta 先生の発表に出てきた点に悩まされています。せめてキャリアの初期段階にある若い人に経験を積んでもらい，かつ，教材やさまざまなサポート体制がある中で経験を積んでもらおうという体制でやっています。続いて茂木先生，お願いします。

茂木（小） 私からは，言うならば起承転結の転の部分に当たる，外から見た立場から話をします。ちょうど私のパワーポイントがそのままになっているので，それを見ていただくと分かりやすいです。次のページです。作っていたのでこちらを見ながら話をします。

私自身は，小学校の頃に慶應義塾幼稚舎という小学校に通っていました。夏休みはアメリカで 20 泊の海外研修，海外交流を経験し，そこで英語が嫌いになりましたが，嫌いになってもこのような大人になります。これは実際の姿です。小学校を終えて高校 3 年生で中国語を選択し，大学 1 年生では中国語を選択したかったのですが，ドイツ語を履修することになってしまいました。そしてドイツ語の活用に悩まされ，今はスペイン語に至るという，大変珍しいパターンではないでしょうか。

そのような私が思っていることは，ここに書いてあるとおりです。社会のニーズはありますが，学校選択は，本人もそうですが，やはり家庭がニーズを持っています。なぜその学校を選ぶのかということに，私たち教員は目を向ける必要があると思っています。小学校の場合は保護者もその 1 人なので，その需要に合う必要があります。では，何を望んでいるのか，自分自身も親なので何を考えるかというと，友達や新しい人とつながるという経験を学校に求めます。友達や新しい人とつながるという経験は 1 人ではできないので，協力しなければできません。友達と何か一緒にやるという経験を求めます。

そして，子ども 1 人ではできないような，言うならば学校が準備したからこそその子の可能性が広がるような経験，環境を求めます。このような部分がスペイン語教育，もしくは学校教育全てにおいて求められていることだと思っています。そのような観点で，皆さんが普段されている授業や活動には意味があるのかと思います。

結局，何が言いたいのかというと，YouTube のような授業は，家庭で勝手に見てもらえればいいのでやる意味がないし，AI でできるようなことも意味がありません。やはり人と人がつながることが大事です。そういう意味では，スペイン語教育は本当に素晴らしいです。言語や文化を知り人がつながっていくことは，私の中では宝船です。この宝船に子どもが乗っていて，先生がたは船頭です。このような宝船をより多くの人たちに知ってもらい，その子どもたちの明るい未来に寄与していくことが求められているのではないでしょうか。以上です。

藤田（大） ありがとうございます。われわれ教員のさまざまなバックグラウンドをうまく利用し，

どのように学生たちの可能性を開いていくことができるかということも重要です。続いて，西村亜希子先生，お願いします。

西村（小・高・大）　初等教育の話でよろしいですか。初等教育の視点と可能性ということでは，小学生は未熟であるということを，大人が自覚しておくことがとても大事だと思っています。子どもは基本的に素直なので教えれば吸収しますが，頭に詰め込み過ぎてはいけません。私自身も小学生の子どもがいます。子育て論になってしまいますが，自分の子どもも周りの子ども光塩女子学院の児童たちも，基本的にとてもまじめで，一生懸命に大人の期待に応えようとしています。

高校生，大学生になると，やりなさいと言われた課題をしないという選択肢が自分の中にありますが，子どもは消耗しながらも課題に取り組みます。プログラミングや英語など新しい授業も増えています。特に都市部の場合は，水泳やそろばんもいまだにあって，ビジネスマンというぐらいにとても忙しいです。習い事が週5日ある子どももいるので，大人が意識的に余白を持たせてあげなければいけません。そこで，課外のスペイン語学習は役割を果たせると思っています。

それは，課外だからこそできるので，ロードマップとして組み立てるときには，これをやるためにこれをやりましょうというのではなく，逆に楽しかったので覚えたということが何年後も残るようなものが，ロードマップ作成時には軸としてあるべきではないでしょうか。スペイン語には，活用の難しさは置いておいても，それを引き付けるだけの魅力はあると思います。英語が嫌いな子がスペイン語は頑張れたというのは，大学生でもよくあるケースです。小学校と中学校でスペイン語を学ぶのであれば，勉強嫌いにさせないことがとても大事です。きょうの発表を聞いて，大学生になったときにスペイン語を選ぶ学生が減るのは怖いと思いました。

とにかく，好きにさせるために明確な目標を奥に持つことは大事ですが，小学生を引き付けるための学習は，大人側の目的が見えるものが多いです。なので，そうではないものが大事ではないかと思いました。

藤田（大）　ありがとうございます。小学生の子どもを持つ親としても，大変共感するところが多い発言でした。続いては，大学から見た高大接続の取り組みについてです。大森洋子先生，お願いします。

大森（大）　明治学院大学教養教育センターで，初習外国語としてスペイン語を教えています。明治学院大学では，既修者のクラスは文学部にフランス語フランス文学科がありますが，残念ながら他の初習外国語にはありません。初習外国語としてコマ数の制限が非常に強く掛かっているため，なかなか新しいクラスをつくることは難しく悩ましいです。

しかしながら，既に高校で学んできた，または外国にルーツがある学生がいるので，その学生には初習外国語相談を毎回行っているので申し出てくださいという形をとっています。そのような学生に向けてはどうにか工夫して専任がエキストラに対応して，個別の授業を作り，その授業を受けてもらえるよう，学生の時間割と相談しながら履修する授業を決めてきました。2018年には，そのような学生も増えてきましたため，2年生で中級スペイン語を必修としている学部があるので，その科目の中に既修の学生は入る形である程度制度化されました。ただし，それも学生の申告制なので相談がくることはなかなかありません。初習外国語の最初の授業の中で先生からの申し出で，特別な形で入っていました。途中になってしまうと，学部の必修科目と重なってしまいクラス編成が難しくなるので，その場合にはまた特別な形を取っていました。

2024年は4月に向けて準備をしていますが，今度はかなり徹底しています。高校で学んでいる人は，まだ時間割が決まらないうちに履修相談にきちんと来てくださいという形で，それぞれの担当教員が面接をします。制度としての試験はありませんが，どのようなことをやってきたかを聴取し，一番良いところに入ってもらう形を考えています。1年生の授業は，文法とコミュニケーションのような形に分かれています。コミュニケーションはできるけれども文法はあまりできない場合もあるので，その辺りは臨機応変にやっていく必要があると思っています。

JACTFLで調べた学校調査（2023年3月）では，発表者として本日参加されている廣瀬さんにかなりご尽力いただいたと聞いています。その調査を見ると，（国内では）98校でスペイン語の授業が設けられていて，関東圏では44校ということでした。明治学院大学はどちらかというと関東圏の学生が多く，既習学生もかなりいると思われるので，きちんとケアをしていく必要があると思います。これはスペイン語だけのデータですが，他の初習外国語も同じようにケアしていきたいと考えています。制度としてはあまりきちんとした形ではないので参考にならないかもしれませんが，以上です。よろしいでしょうか。

藤田（大） ありがとうございます。大変貴重な発言をいただきました。大学側で，いわゆる既修というくくりに入る学生をどのように制度的に扱うかということについては，それぞれの大学で揺れていると思います。中学校，高校で初習外国語として学んできた学生もいれば，今，大森先生がおっしゃった中では，日系人の家庭などでスペイン語を使用してきた学生たちもいるので，それぞれ違うニーズを抱えているということでした。私も神奈川大学では以前からそのような学生に会っていました。一昨年ぐらいからは，慶應義塾大学でもそのような学生と出会うようになったので，どのようにして多様な学生たちの学習ニーズに応えていくかを考えていく必要があります。

大学に入った後でスペイン語科目が必修科目と重複してしまうことがあります。私の記憶が確かであれば，三浦さんも最初の学期は必修の体育とスペイン語インテンシブ2（週4コマ・CEFR A2相当レベル）の授業が時間割上で重なったため履修できず，1学期を終えた後に入ってもらったと記憶しています。その辺りの制度的な仕組みが全部きれいに整えられない苦悩を様々な大学が抱えているように思います。続いて小倉麻由子先生，お願いします。

小倉（高・大） 昭和女子大学国際学科特命講師の小倉麻由子です。今回，なぜこの（座談会が行われているシンポジウムが）昭和女子大学で開催されているかという疑問を持たれたかもしれません。高大接続のスペイン語というテーマで行なっている科研費を受けた研究の研究代表者である私は，これまで3年間は特命講師として，来年度からは専任として，昭和女子大学国際学科でスペイン語のコーディネートをしていることから，当学で開催させていただいています。

私自身は，慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（SFC）で7年間，非常勤講師をしていましたが，そのうち4年間は高校でも兼任で勤務しました。私がスペイン語を教え始めたときは，先ほど申し上げた，CEFR基準のカリキュラムでの授業に変換するスタートアップメンバーとしていろいろと勉強させていただいていたことから，藤田先生のご指導の下，今回の科研チームをつくり上げていくことができました。

SFCについて話をします。藤田先生がおっしゃったように，SFCの高校では大体，1学年60人から70人の生徒がスペイン語を履修しますが，残念ながらSFCの大学内で継続学習をしているのは，毎年1桁台の生徒がいるぐらいの状況です。これはSFC内の大学進学率によるものであったり，先

ほども言われていたように他の授業と重複したりしてしまうからです。特にSFCの場合は，言語の時間を特別に設けているわけではないので，他の授業と重複します。その中で，履修したかったけれども履修できなかった学生がいます。中には，一応続けてみたけれども，時間がかかる割には話せるようにならないので履修をやめる学生もいます。しかし，多くの学生が，スペイン語は楽しい，スペイン語は面白かったと言ってくれるだけでも私たちは教師冥利に尽きます。

ましてや，インテンシブ4（週4コマ・CEFR B1/B2相当レベル）のクラスは，スペイン語の授業の中で最上級のクラスであり，三浦さんは本当に優秀な成績を収めてくれました。インテンシブ4には高畠（理恵）先生と私も関わりましたが，そういった成長を見られたことは非常にうれしく思いました。

一方で，今SFCの中にはスペイン語のルーツを持つ学生が多数いますが，インテンシブ2やインテンシブ3（週4コマ・CEFR B1/B2相当レベル）くらいから，きちんと文法を学びたいと本人たちが言って学び始めるケースがあります。また私自身がそうなのですが，高校の留学機関であるAFSやYFUなどを使い，1年間スペイン語圏に留学をした学生も数名います。1年間留学をしているので，ある程度話せるようにはなっていますが，文法が全くできていない学生がいます。中には，それなりに文法はしっかりできているのでインテンシブ2，3ぐらいから入って続けてくれている学生もいるので，本当に多種多様な学生がいます。現在，私は昭和女子大学国際学科の中でも，既修者の扱いをどのようにするかということが非常に大きな問題になってくると感じています。

昭和女子大学の中でも，昨年3月，ちょうど1年前に卒業した学生の中にロータリーで1年間メキシコに留学していた学生がいました。彼女の場合は，文法が全然できていないので初習外国語として学ぶことに問題はない，むしろありがたいと非常に謙虚に受けとめてくれ，彼女が一生懸命頑張ってくれたおかげで，そのクラス全体を引っ張ってくれたという経緯がありました。表現は良くありませんが，そういった経験者をうまく利用して「使う」ことで，周りが彼女に追い付こうというモチベーションになることもあると感じます。今日手伝いに来てくれている学生の中にも，高校で既修した学生がいます。それでも，ゼロからでも構わないかと聞くと，大丈夫ですと言って頑張ってくれています。そういった姿は，周囲にとても良い影響を与えます。特に昭和女子大学の場合は，国際学科のスペイン語を履修する学生は各年度で20人ぐらいなので，いくつも授業をつくることはできません。その中で先頭に立って引っ張ってくれるような存在になってくれます。

国際学科の場合は，とにかく1年半で全員が留学に行かなければならないという目標があるので，留学したときにしっかりできるようになりたいという思いが下支えになり，初習外国語からしっかりやってくれるかもしれません。その辺りは，それぞれの目標を見ながらうまく調整していくのが一番良いのではないかと思いました。

話は変わりますが，2013年だったでしょうか，高大接続という面から19のスペイン語圏の大使たちが文部科学省に行き，スペイン語を入試科目に入れてほしいと申し出ましたが，残念ながら頓挫してしまいました。私自身はスペイン語が入試言語になってほしいかと言われると，やはり受験のための勉強になってしまうことは少し嫌だなと思ってしまう一方で，それがあることでスペイン語の地位が高校の中で上がることはあるかもしれないとも思います。また，先ほどから出ているような，スペイン語圏にルーツを持つ子どもたちの大学に行くための一つのルートにはなるのかもしれないという気もしています。そういった制度をうまく整えていくことで，日本国内にスペイン語をもっと浸透させていくためのツールにはなるかもしれません。以上です。ありがとうございます。

藤田（大） ありがとうございました。小倉先生の話を一言だけ補足します。湘南藤沢キャンパスの中高等部から大学への進学は，日吉と三田に進学する学生のほうが多く，7，8割の学生が三田と日吉に進学してしまいます。

そういう中で，大学でもSFCで続けてスペイン語を履修する学生は人数として1桁台なので，その1桁台をどう増やしていくかという取り組みをしています。日吉や三田に進学しても，いくつかの学部では既修者のクラスに入ることができると聞いています。それも含めて続けてほしいと思っています。

残りの20分ほどで，もう一度全ての方に発言を回したいと思います。それぞれの方から出ていたように，人材面や労働基準面，あるいは制度面での課題は確実にあると思います。同時に，そういう中でもスペイン語の教育に携わっている意義ややりがいもあると思います。その辺りについてプラス面，マイナス面を両方見ながら最後にもう一度ご発言いただければと思います。各務先生からお願いします。

3.2 継続的なスペイン語教育の実践における人材面・制度面での課題／継続してスペイン語を学ぶことの意義

各務（高） 私はずれた観点から原稿を書いていましたが，考えていることを話させていただきます。私は2年間履修する高校と，1年間のみに限るという高校で教えています。比較の問題ですが，やはり2年間学ぶ高校のほうが，興味を持ってくれる生徒が多い気がします。1年間限定は，英語にはない動詞の活用や名詞の男性形，女性形が出てきて戸惑っているうちに終わり，スペイン語は難しいといった印象，感想を持つ生徒もいます。2年間では，文法的には内容は難しくなりますが面白い，興味が出てきた，大学に行っても続けたいという生徒が多いような気がします。そういった経験から高校でも2年間ぐらい学んだほうが後々に続くような気がします。

スペイン語を学ぶ意義です。私自身は高校で教え始めて長くなりますが，正直に言って初めの頃は私自身が教えながら，高校でスペイン語を学ぶ必要はあるのか，大学に行ってからでも十分ではないかと思っていた時期もありました。しかし，最近はネットなどの影響で，世界の状況が瞬時に自分の手のひらのスマートフォンの中に映し出されます。生徒たちの中には，スペイン語に興味を持ったきっかけがYouTubeで見たメキシコの歌手だとか，スペインの歌手が好きだからという生徒がいます。また，スペイン語を勉強し始めてから南米の大自然の映像を見て，行ってみたいと思ったと話をしてくれた生徒もいます。そういった生徒たちの様子を見ていて，やはり以前より世界が身近に感じられるようになり，英語だけが外国語ではないと実感していることが分かります。若くて感受性が強く，好奇心が旺盛な高校生がスペイン語を学ぶ意義があるのではないかと思っています。

藤田（大） 続けてお願いします。

蛯原（高） 関東国際高等学校の蛯原です。私からは二点あります。高大接続という面で，高校でスペイン語を学ぶ上では，やはり進路へのつながりというのは学校もそうですが生徒本人，そして保護者の方もかなり気にされています。高校のうちにスペイン語を勉強して，一体何の役に立つのか，役に立つという考え方は少し違うのではないかと思いますが，やはり受験に少しでも有利になるのかどうかということはとても気にされています。

実際にいろいろな大学の出願要件を調べてみると，やはりスペイン語検定やDELEの取得が要件

の中にある大学はありますが，そのレベルがスペイン語検定4級やDELEであればB1からの出願を認めるものがあります。高校でのスペイン語の教育状況を考えてみると，そのレベルはかなり高過ぎるのではないかと，教えていて感じます。もう少しレベルを下げて，例えば，スペイン語検定5級からであれば現実的ではないかと思っています。やはり，進路で出願要件として使えることは，生徒本人のモチベーション維持にもなるのではないでしょうか。

もう一点は，人材面というかその辺りですが，実際に高校生にスペイン語を教えていると，文法をマスターしたいというよりもスペイン語圏の，例えばメキシコやスペイン文化が好きでスペイン語の勉強を始めた生徒がいます。私が今持っている生徒では，ピクサー映画の『CoCo』を見てメキシコの文化に興味を持ち，入学した生徒が多いです。スペイン語圏はすごく広いです。私自身も，スペインのスペイン語は大学で深く学んできましたが，やはり他のスペイン語圏であるラテンアメリカについてはあまり知識がない状態です。その辺りを埋められるような大学や，他の皆さんの知見をお借りしながら授業を展開していきたいと思っています。

皆さんはNHK for Schoolをご存じですか。主に，小学生向けの全教科の学習プラットフォームです。例えば理科の各単元の授業に使えるような役立つ動画が一覧になっているオンデマンドのサイトです。そのスペイン語版があればいいなと常々思っています。何かそういったスペイン語圏に関するプラットフォームがあれば，スペイン語の未来がとても広がるのではないかと思っています。以上です。

藤田（大） ありがとうございます。続いて，同じ順番で齊藤先生，お願いします。

齊藤（小・中・高） 慶應義塾湘南藤沢高等部他で非常勤講師をしている齊藤友理です。人材面の課題について，いくつか思ったことがあります。先ほどの光塩の発表でも，初等科ではスペイン語クラスがありますが，内部進学した場合，中高ではスペイン語がないため継続ができないという話をしました。他の先生がたもおっしゃっていたように，中学と高校では受験がとても意識される教育に変わってくるタイミングです。やはり，スペイン語は受験に関係ない科目として扱われるため，中高にクラスがないという現状が多いです。

私がSFCの他に働いている高校では，ある生徒から公募受験の面接で自己紹介をしたいので聞いてほしいという依頼を受けたので，少しだけ添削をしました。そのときに，受験でスペイン語を使ってみたいと思ってくれている生徒がいることはいいなと思った半面，受験に使う科目として受験用のコースが出てきたときに，もしそれを担当してくれと言われると，自分自身がスペイン語で受験をしていないので責任が重過ぎると思いました。スペイン語は小さなコミュニティーだと思いますが，どれくらいの先生が受験対策準備を担当してもいいと言ってくれるのか，という素朴な疑問を持っています。

スペイン語を学ぶ意義については，先ほど，小学生には，このようなことを言ってみたい，やってみたいという楽しいことを重要視してクラスを展開しているという話をしました。楽しい，やってみたいという気持ちは，小学生以外にも言えることだと思います。中学生でも高校生でも，大学生でも大人でもやりたいと思っているその感情自体がすごく大事なことです。そこに意義があるし，やりたいと思っているのであれば，やはり継続は付いてくるものではないかと感じています。やりたい気持ちを引き出していくような授業を展開することが，これから求められていくことではないでしょうか。以上です。

藤田（大） 茂木先生，お願いします。

茂木（高） 光塩女子学院初等科教諭の茂木俊浩です。私の妻の兄は（慶應義塾内でずっと）同じ学年でしたが，（彼は）SFC に入って後，三田に進学しました。まさにそのようなパターンだと思って聞いていました。私は中学・高校生のときに高校 3 年で中国語を履修しました。当時は，先生から中国語検定 4 級を取得できれば 20A あげると言われて，友達と皆で受験して皆，合格しました。慶應義塾高等学校は 20 段階だったので満点の評価でした。その翌年，そのシステムはなくなったと噂で聞きました。きっかけを先生が与えてくださると，子どもは勝手に動き出します。やはり，そのようなところが教育の意義ではないかと，話を聞いていて思い出しました。

NHK for School の話でいうと，コロナ禍ではお弁当や給食を黙食しなければいけなくなり，食事の時間は NHK for School をひたすら流していました。今でも継続しているので，とてもいいことだと私も思いました。

そして，課題面としては皆さまに伝えたいことが二つあります。一つは，インスティトゥト・セルバンテス東京やスペイン大使館などと共同でいろいろなことができればいいと思っています。具体的に言うと，フランス語のスピーチコンテストみたいなものは，大使館や省から人が来て話をしてくれることがあることは，ご存じの方もいらっしゃると思います。そのようなことがスペイン語でもあれば，よりいろいろな立場から，学校機関とは違ったところからの支えというか，そういったものがすごく大事ではないかと思いながら聞いていました。

最後にもう一つ，これは誰に言えばいいのか分かりませんが，スペイン語の教員免許は通信では取得できないという問題です。英語と中国語は取得できますが，スペイン語は取得できません。もしも取得できれば私は取得したいですが，仕組みはありません。いろいろな働き掛けによって，より 1 人でも多くの方が取得できるような環境づくりが動かしていくきっかけになると思うので，そうなればうれしいです。以上です。

藤田（高） ありがとうございます。続いては西村先生，お願いします。

西村（小・高・大） 立教大学外国語教育センターの西村です。私は，外国語学習は生涯学習だと思っています。考えてみると，9 歳ぐらいから 70 代の方までスペイン語を教える機会があります。それぞれの段階で，いつか行くために勉強する人もいれば，いつか行った思い出の語学になるので，継続していくことには意味があると思っています。

意義を考えたときに，ネイティブの先生とネイティブではない先生ができる役割は本当に違います。私はネイティブではないので，日本人のスペイン語教員として思ったときには私自身が学習者です。今後も一生学習者なので，学生から見ても学んだ結果が自分の姿だと自覚を持つようにしています。私は社会人からもう一度大学院に戻ったときに，スペイン語を学ぶことで自分の人生が豊かになったという感覚がありました。恩返しではありませんが，スペイン語でもっと楽しくなればという思いがあったので，教員がスペイン語の学習者モデルだという自覚を持って楽しそうに生きることは，どの年代に対してもそうですが，とても大事なことではないかと思っています。

今回はスペイン語ですが，何でも継続して学ぶことの意義は，最終的にはそれぞれの人生が豊かになることです。そのためのアプローチがそれぞれの立場からあっていいと思いますが，基本は忘れないでいたいと思っています。そうすると，教員自身が幸せでいることは大事です。大学などいろいろな所でも，非常勤教員の先生がたで回っているような状況です。私自身もそうですが 1 日でいくつか（の大学を）回ることがあり，先ほどの発表にもあったように，疲れてきます。やりたいこととできる

ことのバランスが悪くなってしまうということは，引き続き訴えていきたいです。研究だけではなくプライベートも含められていくとなれば，待遇含めて，これから気が付いた人たちがこのように話を進めていくことは，すごく大事ではないかと思いました。

藤田（大） ありがとうございます。ぜひ，話題にしていきたいです。大森先生，お願いします。

大森（大） 大森です。茂木先生や西村先生から指摘されていることですが，私から今後の課題としては，やはり，スペイン語教員の養成や研修などをどのようにやっていく必要があるかということが非常に大事になっていくと思います。西村先生が言われたように，われわれは一生，スペイン語の学び手であり，完全に話せないけれどもスペイン語のスピーカーです。もう一つの側面としては，学習者であること，教員としてはスペイン語を学んでいるという姿勢を，学生や生徒に見せることは非常に大事ではないかと思っています。

そういう中で，それぞれの学校でのアクティビティ等の情報共有，授業展開に関する体験の交換，インスティトゥト・セルバンテス東京が行っているいろいろな文化的なイベントや研修会，出版社はどのような信念で教科書を出しているか，それを使ったスペイン語教師の研修，教科書の工夫等，高校のスペイン語の先生がたのネットワークができることを非常に期待しています。情報交換としては，スペイン語教員の養成の必要性，学習の年齢による工夫などがいろいろな観点からも学びにつながっていくのではないでしょうか。また，それぞれの学習経験を共有すれば，それぞれの学習機関で生かしていくことができると思っています。

もう一つ，制度上の問題ですが，自分の中で頭に残っているのは新学習指導要領が導入され，高校等では午前中の日比野先生の発表にもあったように，観点別評価が導入されました。パフォーマンス課題等で思考力の育成や主体的な学びができるようにやっている中で，せっかく目標として新しい生徒を養成していこうという中で逆戻りしないように，われわれ大学の教員も照準を合わせて頑張っていかなければいけません。今後はいろいろな形の研修をしていく必要があると思いました。知識を積む，語彙を暗記する，文法を学ぶところからもう少し別の観点も入れた形でのカリキュラム，外国語学習の多様性を重要視したような展開が必要ではないでしょうか。大学として受講生が少ないからという形で，開講コマ数を減らすという機械的な判断ではなく，やはりいろいろな視点から多様な外国語教育が必要だという点で，カリキュラムを考えてほしいです。

継続して学ぶ意義としては，グローバル化と言われる中でまだまだ英語一辺倒の社会です。そういう中で，英語ができればという形で小学校から英語を入れて，国語教育とかはどのようになっているか，ということもあります。一つの言語を継続して学習するという，とりわけスペイン語という多くの国々で話されている言語の中では，多様性ということを嫌でも感じます。スペインではこう言うけれども，他のスペイン語圏の国に行けば違う言葉を使う，文法的にはこれでも大丈夫だということもあります。同じ一つのスペイン語と言われながらいろいろな表現形式があるというところは，文法にとらわれずにコミュニケーションをすることにも少し視点を向けることができるかもしれません。

最後に別の観点から言えば，将来，仕事やその他の状況でスペイン語以外の言語を学ばなければならないとなったときでも，スペイン語の学習の経験が楽しいものであれば，他の言語に挑戦していくことができると思います。われわれは教えるときには，プラスの経験になるような形の学習をやっていきたいです。苦しい経験をしたけれどもその結果，このような楽しいことがあったというような経験が非常に大事です。それが別の言語を学ぶときにも生きてきて自律的な学習となり，生涯にわたり

何かを学習していくというチャレンジングな形で実現していくのではないかと日々思っています。以上です。

藤田（大） 続いて，小倉先生お願いします。

小倉（大） まず人事面に関して話をします。自分自身も数年前までは非常勤としてあちらこちらの学校に行っていましたが，今度は専任になって，大学の人事みたいなことに少しずつ関わっていくことになりました。今，大学はどうしても非常勤講師に頼らざるを得ない状況になっています。そのような中でも，例えば5年雇い止めされるところもあり，非常勤講師は国民保険を自分で支払っていますが，少なくとも非常勤講師共済みたいなものがあれば，それで支えることができるのではないか，といったことを思うようになっています。

5年の雇い止めはもっての外だと本当に思います。例えば，昭和女子大学では最初の5年間は1年の契約更新で，5年経ったのちは無期転換にしてくれました。慶應義塾大学も10年間は1年更新で，そこに到達すれば一度辞めなければいけないということはありません。しかし，高等部では残念ながら5年雇い止めがあります。雇い止めという言葉は非常に恐怖感を与えるものです。そのような中でクオリティの高い教育を続けられるでしょうか。せっかく一生懸命プログラムを立ち上げても，それを5年で次の人に渡さなければいけない，またゼロから始めなければいけないような状況になってしまう中で，どれだけの人が一生懸命にできるでしょうか。そういったことを，学校側や国が見極めてしっかり対応してほしいです。

指導要領については，午前中の発表者である日比野先生と廣瀬先生もおっしゃっていましたが，これまで外国語は英語に準ずるという冷たい一言で片付けられてきました。しかし，高校では生徒は既に英語を何年も学んでいます。高校の外国語教育なので，当然，高校の指導要領の英語に準ずると硬く理解してしまうと，同じ指導要領を初習外国語としてのスペイン語に使うことはできません。そのため，中学校の指導要領に従ってやっていくことが一般的なやり方になりますが，中学生と高校生の精神年齢の違いが配慮されないことになります。このような点からすると，文科省は外国語を学ぶことを強く推奨するけれども，実際問題はやはり英語に特化してほしいという本音が透けて見えます。

先ほどから言っているように，決して私は生徒たちにバイリンガルになるために学んでほしいとは思っていません。そこから将来的にバイリンガルになるような人材が生まれることになればそれはそれでいいです。すぐにそこで高いレベルに達するものではないと思います。

また，茂木先生や他の先生がたの話もそうですが，ヴィゴツキーのいう最近接領域[3]というのでしょうか，少し上のレベルにいる人がその下のレベルにいる人の能力を引き上げる，教員はそのような存在です。先ほどの宝船という表現は，まさしくそのとおりです。このように，言語教育というものを通して，少しずつ生徒たちの人間力を高めていきます。茂木先生は，本来は理数系の先生で，多くの先生がなぜ理数系の先生が言語教育に関わっているのか，と思われる中で，本当にありがたい存在だと私はいつも思っています。理数は本当に大切であり，漢字も国語も大切ですが，外国語を学んだからといってそれらの教科が学べなくなる，というとそうではありません。日比野先生も実践されていましたが，むしろ外国語の授業の中で，教科横断的に地理や歴史といった他のものを取り入れることができます。また，外国語を勉強し，自分の母語を意識的に振り返ってみるようになることで，母語についても学ぶことができます。

自分の教え方も，このような変化に合わせて変えていく必要がまだあるかもしれないと，私自身，

毎日反省しながらやっています。私たちの発表の中でも申し上げましたが，世界観が広がる，言語感が広がることは，価値観を広げて人間性を高めていきます。結局，外国語教育は，そこに通じていくと信じています。もちろん非常勤の先生がたが担当しているのは外国語だけではなく，全ての教科を支えています。だからこそ，生活の恐れというものをなくし，安心してしっかり教育に向き合って行けるような制度が生まれていってほしいです。以上です。

藤田（大） 小倉先生，ありがとうございました。（了）

おわりに

今回の座談会では，これまでほとんどこのようにさまざまな教育機関でスペイン語教育に携わる教員が集まる機会がなかったことから，できるだけ多くの知見を短時間で得るべく，焦点がはっきりしなくなってしまった点については否めないものの，このように多様な立場からの経験談や報告，意見の共有が得られたことで，以下のような重要な点についての知識が得られた。

まずは，公立学校で教えるためには多くの場合で教員免許が必要となるが，スペイン語で教員免許が取得できる大学は少なく，中には英語教員が，自ら積極的にスペイン語の授業の開設を働きかけて行われているような公立校もいくつか存在している。新学習指導要領の外国語編での英語以外の外国語の扱い方は，「英語に準ずる」の一言で片づけられていた当初よりも，現在は英語のどの部分を参照すればよいかが示されるようになっただけ改善したものの，ほとんどの生徒が高校で初習となるにもかかわらず，高校の英語の指導要領を参照するのは，いささか無理がある。その辺りを含め，もう少し改善の要求をしていく必要がある。さらに，スペイン語の教員免許の取得がもう少し容易にできるようになることなども必要であることが判明した。

また，スペイン語教員の養成，研修の重要性とそのための教員間の情報共有の重要性を再認識した。これは他言語も同じようなことが言えるが，教員間には専門がスペイン語学，スペイン語教育というものもいれば，歴史や文学といった言語系ではない教員もいて，その中でスペイン語の教育といったことを十分に話し合った上で授業案を立てていくことは，特に小学校の頃から英語教育を受けてくる生徒たちが大学生になるのを向かい入れる準備をしていく上でも重要になっていく。特に，新学習指導要領において，外国語によるコミュニケーション力が重視されていることから，学習者たちの言語学習に対する考え方もこれまでの学生とはさらに異なってくる。その上で，教員側としては常に変革ありきの姿勢で臨む必要がある。

さらに教員の雇用形態については，働き方そのものについてはいろいろな考え方があるため，専任にこだわる必要はなく，また，週に１コマ，２コマといった授業のために専任として雇うわけにはいかないことは理解できるが，熱意をもってゼロからカリキュラムを作り，教材を準備し，学習目標もあまり明確でない中で教鞭をとる教員も多い中で，少なくとも何かしらの安定感を与える要素は与えて欲しいと考える。ただし，これについてはスペイン語だけの問題ではなく，日本の教育界全体の問題でもあるため，スペイン語側からもそのような声をあげて他領域の教員とも連携する必要はある。

それ以上に重要なことは，教員が５年経つと職を辞してまた違う教員に変わらなければならない，というような制度があることで，せっかく立ち上げたカリキュラムがちょうど良い具合に回るようになると，また新たにゼロから作り出されたものに変わり，質の良い教育の担保が難しくなる。同時に，公立校では，やる気のある教員が作り出した授業が，転勤などで次に残せないようなこともあるため，

「スペイン語」の授業を継続することが困難なケースもある。こうしたことを改善する必要性があることを訴え続けることで，スペイン語教育の高大接続が可能となることが見えた。

教員も学習者であるという認識を忘れず，その姿を生徒・学生たちと共有しながら，共に学んでいかなくてはならない。これもスペイン語だけに限ったことではないかと思うが，スペイン語教育の場合，世界的に見ればそれなりの歴史は積んでいるが，日本の中では比較的新しい言語である一方で，多くのネイティブ教員たちがスペイン語教育法を学んだ教員たちであることから，スペイン語教育に関する考え方の乖離も激しいところがある。また，高校の授業は多くの場合，大学と掛け持ちしている非常勤講師が携わることが多い一方で，高校生と大学生とでは，年齢差はさほど大きくない中で，それぞれの置かれた状況（評価方法の違いや定期試験の回数，成績が進路に与える影響など）が異なるため，学習に対する意識が異なってくる。だからこそ，お互いに情報共有をし，同じ教育機関に所属していなくても，緊密な連携を取ることで日本におけるスペイン語教育の質を高めていくことができると考える。

最後に，スペイン語の高大接続の現状としては，一部において個々の教員が高大接続という意識を持って手探りで活動を行っているが，そもそも高大接続ということ自体が新しく，ようやくいろいろな大学において高校生を科目等履修生として受け入れることなどが始まったところである。当然のこととして，今回すべての問題点について触れることはできなかった。また，高校と大学におけるカリキュラムの違いを明確化させる必要があるなど，今後さらに精査し，明らかにしていかなければならない問題は残っている。しかしながら，現状を知る目的で，ほとんど前例のない状況下でさまざまな教育機関に関与するスペイン語教員たちが意見を交換し，同じ方向性に向かってスペイン語教育を推進していけるようにしていけるようにするために集ったことの意義は高い。このような点で，今回のシンポジウムを開催し，座談会を開いたことの意義はあったと考える。

注）

1. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/020-17/houkoku/06040408/001/004.htm#top（2024年8月16日参照）
2. 猫の動画の切り取り素材を使用し，歌やダンスだけでなく，人間の日常生活を再現した動画。最近では猫以外の動物も使用されている動画もある。
3. ヴィゴツキー（Lev S. Vygotsky）旧ソビエト連邦の心理学者。著書の「思考と言語」（1934）において，子どもの思考と言語の発達に関して行った研究について論じているが，その中で『最近接領域』（『発達の最近接領域』または『最近接発達領域』）という言葉について，「ことばの教授，学校における教授は，ほとんどが模倣に基づく。まさに学校において子どもは，自分が一人でできることではなく，自分がまだできないこと，しかし教師の協力や教師の指導のもとでは可能なことを学ぶのである」（柴田義松訳，2001，p. 302,）と説明している。すなわち，子どもが，自分一人ではできないことが誰かのサポートによってできるようになることを意味している。

参考文献

Instituto Cervantes.（2024年8月16日）. *El español: una lengua viva. Informe 2023*. 参照先：Centro Virtual Cervantes: https://cvc.cervantes.es/lengua/anuario/anuario_23/informes_ic/p01.htm

Vygotsky, Lev Semenovich.（1934）. *Мышление и речь*.（ヴィゴツキー，レフ・セミョノヴィチ著．柴田義

松（訳）（2001）.「新訳版・思考と言語」新読書社）
一般社団法人 日本外国語教育推進機構（JACTFL）.（2024 年 8 月 16 日）. *List_Gengo_20231104*. 参照先：高等学校等外国語科目調査 14 言語版（文科省調査との比較）：chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://www.jactfl.or.jp/wdps/wp-content/uploads/2023/11/List_Gengo_20231104.pdf
小倉麻由子.（2019）.「SFC における多言語多文化社会構築に向けた，高大接続のスペイン語教育を目指して」. *KEIO SFC JOURNAL*. Vol. 19. 慶應義塾大学湘南藤沢学会. pp. 192-207.
泉水浩隆.（2009）.「日本（の大学）における第 2 外国語教育をめぐる現状と課題―スペイン語教育を中心に―」.『学苑』821. 昭和女子大学. pp. 43-52.
田中慎也.（2010）.「日本の外国語教育政策と共生の論理」. *Revue japonaise de didactique du français*. Vol. 5, n. 1. Etudes didactiques, La Societe Japanaise de Didactique du Francais. pp. 368-372.
中央教育審議会.（2014）. 新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育，大学教育，大学入学者選抜の一体的改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ，未来に花開かせるために～. 参照先：文部科学省：https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/__icsFiles/afieldfile/2015/01/14/1354191.pdf
文部科学省.（2009）. 高等学校学習指導要領（平成 21 年 12 月）解説　外国語編　英語編.
文部科学省.（2018）. 高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説　外国語編　英語編.
文部科学省.（2024 年 8 月 16 日）. 20230403-mxt_kouhou02-1. 参照先：報道発表　令和 5 年 3 月 31 日：chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/koukousei/20230403-mxt_kouhou02-1.pdf
文部科学省.（2024 年 8 月 16 日）. 英語以外の外国語の科目を開設している学校の状況について（平成 26 年 5 月 1 日現在）. 参照先：文部科学省：chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/058/siryo/__icsFiles/afieldfile/2016/05/25/1371098_1.pdf
文部科学省.（2024 年 8 月 16 日）. 3. 高等学校と大学との接続における一人一人の能力を伸ばすための連携（高大連携）の在り方について. 参照先：文部科学省：https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/020-17/houkoku/06040408/001/004.htm#top
文部科学省.（2024 年 9 月 6 日）. グローバル人材の育成について. 参照先：文部科学省：chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siryo/__icsFiles/afieldfile/2012/02/14/1316067_01.pdf
山崎吉郎.（2014）.「高等学校における複言語教育の現状・展望と大学教育との連携について」.『アジア諸語を主たる対象にした言語教育法と通言語的学習達成度評価法の総合的研究：中間報告書（2012-2013））』. 東京外国語大学. pp. 11-22.

添付資料 1.　シンポジウムポスター

2024年3月3日(日)
Domingo 3 de marzo de 2024

シンポジウム
「スペイン語教育における高大接続の現状と未来

Simposio
"La situación actual y el futuro de la enseñanza del español. Su continuidad entre Institutos y Universidades"

開催場所：
昭和女子大学8号館6階オーロラホール
東京都世田谷区太子堂1-7-57
最寄り駅：東急田園都市線三軒茶屋
Google Mapをご使用の場合
「昭和女子大学正門」で検索してください。
時間： 10:00〜16:00

Lugar de celebración:
Universidad Femenina de Showa, Edif. 8 - 6° piso, "Aurora Hall"
1-7-57 Taishido, Setagaya-ku, Tokio
La estación más cercana: Sangenjaya, línea Tokyu Denentoshi
En el caso de realizar la búsqueda en Google Map, introduzca "Showa Women´s University main gate".
Horario: De 10:00 a 16:00

注1　当日ご来場の際には、正門横守衛室にて「シンポジウム参加」とお伝えください。
El día del simposio, para acceder al campus informar al guardia de seguridad que viene al simposio.

注2　Zoomでの参加をご希望の方はこちらのリンクからご登録いただくと当日参加用URLが自動的に送られますので、そちらのURLからご入室ください。尚、このURLは個に割り当てられるため、他の人に漏らしたり、なくしたりしないようご注意ください。
Si desean participar por Zoom, es necesario registrarse primero a través de la siguiente URL. Recibirán automáticamente el enlace para participar en el simposio. Sólo recibirán el mensaje las personas registradas. Les rogamos que no lo compartan y/o que no lo pierdan.

注3　当日は学食やキャンパス内のコンビニが閉店している場合がありますので、ご昼食は各自ご持参ください。Les recomendamos traer su propio almuerzo porque la cafetería de la universidad estará cerrada.

zoom
https://swu-ac-jp.zoom.us/meeting/register/tZwrfuGprjwoEtEem-MjMYLCezd2WDLK407Q3

プログラム
Programa

主催： 昭和女子大学国際学部国際学科
Patrocinado por: Universidad Femenina de Showa, Dept. de Estudios Internacionales

共催： 慶應SFCスペイン語・スペイン語圏研究室
Copatrocinado por: Universidad de Keio en Shonan-Fujisawa (SFC), Dept. del español y el mundo hispano

共催： 清泉女子大学スペイン語・スペイン文学科
Copatrocinado por: Universidad Seisen, Dept. de Lengua y Literatura Españolas

昭和女子大学 Showa Women's University
SFC KEIO UNIVERSITY
清泉女子大学 Seisen University

科研研究グループ「多言語多文化社会構築に向けた高大接続のスペイン語教育」基盤研究(C) JSPS科研費JP 21K00791 研究代表 小倉麻由子(昭和女子大学) Proyecto KAKEN (C) JSPS科研費JP 21K00791 "Enseñanza unificada del español/castellano en la escuela secundaria y en la universidad." Investigadora principal: Mayuko Ogura, Universidad Femenina de Showa.

シンポジウム

Simposio

「スペイン語教育における高大接続の現状と未来」

"La situación actual y el futuro de la enseñanza del español. Su continuidad entre Institutos y Universidades"

プログラム ／ Programa

発表要旨 ／ Resúmenes

プログラム / PROGRAMA

9:30 – 10:00　受付 / Inscripción

10:00 – 10:15　開会 / Apertura

10:15 – 10:35　「高等学校初習外国語としてのスペイン語～パフォーマンス課題の実践とカリキュラムの逆向き設計～」神奈川県立深沢高等学校総括教諭 日比野 規生

10:35 – 10:55　「高校で使用されているスペイン語教科書の現状と課題」
上智大学大学院言語科学研究科博士後期課程 廣瀬 瞳

10:55 – 11:10　休憩 / Descanso

11:10 – 11:30　La enseñanza del español en centros de secundaria. Voces de los profesores.
Carmen García y Verónica Prieto, Universidad de Keio en Shonan-Fujisawa (SFC)

11:30 – 11:50　「生徒たちの声 –高校 3 年生へのアンケート調査と高大を通じて学ぶ学生たちへのインタビュー調査より–」
慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス(SFC)非常勤講師 高畠 理恵、昭和女子大学国際学部国際学科特命講師 小倉 麻由子

11:50 – 12:10　質疑応答 / Preguntas y respuestas

12:10 – 13:10　昼食 / Descanso para comer

13:10 – 13:15　受付 / Inscripción

13:15 – 13:35　「高校生スペイン語スピーチコンテストから見えてくるもの」
清泉女子大学スペイン語スペイン文学科教授 齋藤 華子・准教授 駒井 睦子

13:35 – 14:05　「小学校におけるスペイン語を通した複言語教育–光塩女子学院初等科での取り組み–」
光塩女子学院初等科教諭 茂木 俊浩・光塩女子学院初等科 非常勤講師 齊藤 友理、立教大学教育講師 西村 亜希子

14:05 – 14:25　Experiencias en el aula de español como segunda lengua: retos para un docente no japonés.
Violetta Brazhnikova Tsybizova, Keio Chutobu, campus de Mita

14:25 – 14:35　休憩 / Descanso

14:35 – 14:45　「高校スペイン語教師のネットワークの必要性」高校スペイン語教師の会 準備メンバー

14:45 – 15:45　ラウンドテーブル / Mesa redonda
司会：慶應義塾大学環境情報学部専任講師スペイン語・スペイン語圏研究室コーディネーター藤田護
登壇者：明治学院大学教養教育センター教授 大森 洋子・兵庫県立国際高等学校非常勤講師 各務 恭子・関東国際高等学校教員 蛯原 帆奈海
慶應義塾大学環境情報学部学生 三浦 彩貴・茂木 俊浩・齊藤 友理・西村 亜希子・小倉 麻由子

15:45 – 16:00　閉会 / Clausura

高等学校初習外国語としてのスペイン語
～パフォーマンス課題の実践とカリキュラムの逆向き設計～

日比野規生（神奈川県立深沢高等学校）

１．はじめに

本発表は神奈川県立深沢高等学校の学校設定科目『スペイン語』における令和４年度及び令和５年度の実践報告である。

神奈川県鎌倉市に位置する深沢高校は全日制普通科・学年進行制という、一般的な普通科高校の教育活動を展開している。普通科目を中心としたカリキュラムのため、多様な選択科目や英語以外の外国語の授業はこれまで開講されていなかった。

令和元年度、筆者が同校に着任し、これまで実施してきた県民対象のスペイン語公開講座を深沢高校でも実施すると、多くの生徒たちからスペイン語の授業を開講してほしいとの声が上がった。

そのため、神奈川県教育委員会へ開講の申請手続き行い、令和４年度に『スペイン語』を開講した。

本発表では学校設定科目『スペイン語』の５つの重点項目を実践例とともに紹介してゆく。また、平成 30 年告示の学習指導要領にある３つの観点（『知識・技能』『思考・判断・表現』『主体的に学習に取り組む態度』）と評価・評定の関係についても事例を交えながら紹介したい。

２．深沢高校における学校設定科目『スペイン語』の取り組み

本校の『スペイン語』では、次の５点を取り組みの重点項目として授業を展開している。

(1)各単元（内容のまとまり）にパフォーマンス課題を配置し総括的評価の材料とする。【パフォーマンス課題の年間配置】

(2)各単元のパフォーマンスの主要素を組み合わせると最終単元のパフォーマンス（＝年間目標）ができるような指導計画を設計する。【カリキュラムの逆向き設計】

(3)パフォーマンス課題の GRASPS（Goal ,Role, Audience, Situation, Product, Standards and. criteria for success)を明確にした上で生徒に提示する。（順に目的・役割・相手・状況・作品・観点）（西岡加名恵　著　「パフォーマンス評価で生徒の「資質・能力」を育てる」参考）

(4)年間目標、単元目標、単元の評価規準、パフォーマンスのルーブリックに連関を持たせる。【指導と評価の一体化】

(5)異なる文化を背景とする人々の考えを尊重し、対話できる力を養うことを目的とした社会文化的内容を計画的に実施する。【社会文化領域内容の年間配置】

３．発表に向けて

このように本発表はパフォーマンス課題の取り組みを中心に紹介してゆくが、生徒たちが楽しみながら、生き生きとスペイン語を学んでいる様子も感じていただけると幸いである。

参考文献

「外国語教育を変えるために」三修社　境 一三 著 / 山下一夫 著 / 吉川龍生 著 / 縣 由衣子 著

「パフォーマンス評価で生徒の「資質・能力」を育てる」学事出版　西岡加名恵　著

「アクティブ・ラーニングをどう充実させるか資質・能力を育てるパフォーマンス評価」明治図書、西岡加名恵　編著

高校で使用されているスペイン語教科書の現状と課題

廣瀬　瞳（上智大学大学院言語科学研究科博士後期課程）

本発表では、高校で使用されているスペイン語の教科書の現状と課題について述べる。発表者は、高校と大学の両方で非常勤講師としてスペイン語を教える一方で、大学院で高校のスペイン語教育に関する博士論文に取り組んでいる。本発表ではそれぞれの立場から、(1)高校と大学のスペイン語教育の違い、(2)高校向けの教科書の必要性、(3)教科書による高大接続の可能性、という3つの点に関して言及する。

高校と大学のスペイン語教育では、人数の規模、授業の位置付け、授業時間、テストや評価の時期や評価方法等、さまざまな面で違いがある。例えば、高校の授業時間は大学と比べて非常に限られているため、大学向けの教科書の内容を高校で一通り終えることは難しい。また、高校ではわずかな授業時間数と進度の中で中間・期末テストといった定期考査を年2〜5回ほど実施する必要がある上、学習指導要領の改訂により「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」という3つの観点別評価及びパフォーマンステストが求められている。

そこで、高校の現場に特化した教科書があると望ましいと考えられる。具体的な案としては、学習内容に関しては、文法項目を大学の教科書よりも限定することや、文法シラバスではなくタスクシラバスにすることなどが考えられる。また、文法以外の面では、自身の研究である Wada (2023) において高校で使用されている教科書におけるスペイン語圏の地理的言及はスペインが半分近くを占めていることが明らかにされている。日本に住む学習者にとって、教科書はスペイン語圏のイメージを形成する重要な役割を担っているため、現実のスペイン語圏にある多様性を教科書においても反映させると良いのではないか。加えて、現場のニーズの観点からは、例えばパフォーマンス課題を教科書内のアクティビティとして含んだり、観点別評価に対応したテストのサンプルを教授用資料につけたりすることで現場の教員の助けとなるだろう。

さらに、高校向けの教科書は高大接続の観点からも利益をもたらすと考えられる。例えば、高大接続において高校でのスペイン語既習者の大学における学習内容の接続が課題とされるが、もし高校向けの教科書が広く浸透したとすれば、大学側も既習者がどの程度まで学習したのかを想定・把握することが今よりも容易になり、学習面での高大接続に貢献できるのではないか。本発表では、高校と大学の教育現場の違いや高校の現場のニーズについて考えることで、日本のスペイン語教育の現場における教科書の重要性を認識し、教科書による高大接続の可能性を提示する。

参考文献

Wada, Hitomi. (2023). La diversidad lingüística y sociocultural en los libros de texto de ELE: un estudio. cualitativo sobre los manuales usados en los centros de bachillerato japoneses. *HISPÁNICA*, 66, 83-108.

La enseñanza del español en centros de secundaria. Voces de los profesores.

Verónica Prieto (Keio SFC)
Carmen García (Keio SFC)

La enseñanza del español en universidades es un tema que ha sido y sigue siendo tratado en diferentes estudios, pero existe una falta de información en español sobre la situación de la enseñanza del español en los centros de secundaria en Japón. Normalmente el foco está puesto en los estudiantes o en el manual, pero poca atención se le presta al papel de los profesores y a las condiciones en las que tiene que llevar a cabo su trabajo.

El objetivo de esta ponencia es efectuar un acercamiento a través de las voces de los profesores de español en los institutos de enseñanza secundaria. Para ello, se efectuó una encuesta de mayo de 2023 hasta febrero de 2024. La encuesta se envió a centros educativos, grupos académicos o de forma directa a los profesores. Se llevó a cabo de forma bilingüe, japonés y español. Para conseguir una visión más amplia se trataron temas que abarcan desde aspectos académicos (formación y experiencia académica), sobre el centro educativo (tipos de institución, enfoque metodológico, organización de las clases, niveles de enseñanza, tipos de asignatura) y sobre la situación laboral (tipo de contrato y su duración). Basándonos en los resultados, más de la mitad de los profesores son de nacionalidad japonesa y casi todos los encuestados tienen algún tipo de formación específica en ELE con más de 5 años de experiencia en la enseñanza del español. El nivel predominante es A1 con clases de 45 o 50 minutos 2 veces a la semana. Respecto a los materiales, un gran número de docentes usa un manual basado en el avance gramatical, pero más de la mitad sigue un enfoque comunicativo. Dentro de todas las modalidades de contrato, la situación de más de la mitad de los profesores es a tiempo parcial con duración determinada, que en su mayoría es sólo de un año. Esta inestabilidad laboral puede tener efectos negativos en la enseñanza a la hora de desarrollar proyectos o crear un compromiso con el centro.

Proyecto KAKEN (C) JSPS 科研費 JP 21K00791

【日本語訳】

教員たちの声—中等教育におけるスペイン語教育

ベロニカ・プリエト（慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス）
カルメン・ガルシア（慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス）

大学におけるスペイン語教育は、これまでも、そしてこれからも様々な研究で扱われるテーマであるが、日本の中等教育におけるスペイン語教育の状況について、スペイン語での情報が不足している。通常、生徒や教科書に焦点が当てられており、教員の役割や勤務状況にはほとんど注意が払われていない。

本発表の目的は、中等教育機関のスペイン語教員の声を通してその実情を知ることである。そのために、2023年5月から2024年2月にかけてアンケート調査を実施した。このアンケートはスペイン語の授業を開設している学校には郵送で、学会や研究会を通じての配信や個人宛には電子メールで送信され、日本語とスペイン語のバイリンガルで行われた。より広範な全体像を把握するため、教員の履歴や専門分野、勤務先の学校（教育機関の種類、教育法、クラス編成、指導レベル、授業科目の分類）、契約の種類（雇用形態とその期間）について質問を行った。その結果、半数以上の教員が日本国籍であり、回答者のほとんどが外国語としてのスペイン語教育について何らかの特別な訓練を受け、5年以上のスペイン語教育経験があることがわかった。対象クラスのレベルはA1が主流で、授業は週2回、45分または50分である。教材については、多くの教員が文法ベースの教科書を使用しているが、半数以上がコミュニカティブ・アプローチを採用している。契約形態については、半数以上の教員が、毎年更新が必要となる非常勤である。このような雇用の不安定さは、授業プログラムを発展させることや学校へのコミットメントを生み出すという点で、教育に悪影響を及ぼす可能性がある。

生徒たちの声 –高校 3 年生へのアンケート調査と高大を通じて学ぶ学生たちへのインタビュー調査より–

高畠理恵（慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス）
小倉麻由子（昭和女子大学国際学部国際学科）

1990 年の創設以来、慶應義塾湘南藤沢キャンパス（以下 SFC）では「多言語主義」の理念の下「多言語多文化共生社会プロジェクト」が進められており、海外在住経験が豊富な学生や、海外出身者、外国にルーツを持つ学生が数多く在籍している。そのようなバックグラウンドを持つ学生にも適した言語教育システムを構築する目的で、スペイン語では、ヨーロッパ言語共通参照枠（以下 CEFR)に基づいたカリキュラムで授業が運営されている。

一方、同じキャンパス内にある慶應義塾湘南藤沢高等部（以下 SFC 高等部）では、1992 年創設時の 1 期生が高校 3 年（学内では 6 年生）になった 1994 年以降、第二外国語教育が行われてきており、2020 年からは 2 年生（学内では 5 年生）から 2 年間継続で履修するようになった。2017 年度からは、高大のスペイン語教育におけるカリキュラムの接続を目指して、高等部でも CEFR 準拠の教材を使って構築されたカリキュラムに変更した。この授業カリキュラムにおける、生徒/学生たちの声を集めるため、高校在学時にアンケート調査を、その後大学で継続的に学習をした 4 名に対してインタビュー調査を行った。

アンケートで「スペイン語学習に関すること」などについて聞き取りを行った結果、「スペイン語を選択してよかったか」の問いに対し、92%が肯定的な回答を選択した一方で、「卒業後の継続学習」については、62%が継続を希望し、33%は継続を希望せず、5%は無回答であった。このアンケート結果から、多くの生徒がスペイン語学習を肯定的に捉えていることがわかったが、継続学習に関してはさまざまな理由によって、肯定的な意見が 62%に留まった。

その結果を受けて、継続的に学習している 4 名に継続理由を聞き取りしたところ、高校での授業が楽しかったことや「スペイン語」という言語の勉強のしやすさをその理由として述べていた。さらに、学習を続けたことにより、文化的価値や英語に対する見方が変化し、世界観の広がりを思わせるコメントも見受けられた。また、資格認定テストを受験し、SFC (大学) の既習者クラスにて学習を継続していた 2 名は、半年というブランクがあったにもかかわらず、高校で学習した知識を活かし、スムーズに授業に参加できたと話しており、SFC 高等部と大学間の接続におけるカリキュラム上の一成功例と言えるだろう。高校でのスペイン語の授業は多くの生徒にとって初習言語となるため、言語学習における導入の重要さが今回の調査で伺えた。

本研究は JSPS 科研費 JP21K00791 の助成を受けたものです。

参考文献

慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス「多言語多文化共生社会プロジェクト」https://multilingual.sfc.keio.ac.jp/（最終閲覧日：2024 年 2 月 6 日）

小倉麻由子（2019）「SFC における多言語多文化社会構築に向けた、高大接続のスペイン語教育を目指して」『KEIO SFC JOURNAL』 Vol.19, No.2, 慶應義塾大学湘南藤沢学会 pp.192-207

小倉麻由子、高畠理恵他（2023）「SFC における多言語多文化社会構築に向けた、高大接続のスペイン語教育ーコロナ禍でのカリキュラム改革の経験ー」『慶應義塾外国語教育研究』第 19 号, pp.99-123

高校生スペイン語スピーチコンテストから見えてくるもの

齋藤 華子（清泉女子大学スペイン語スペイン文学科）
駒井 睦子（清泉女子大学スペイン語スペイン文学科）

スペイン語の有用性は世界でますます高まっているものの、現在の日本では、スペイン語やスペイン語圏の文化に触れる機会や、その重要性を感じる場面は極めて少ない。高校生がせっかくスペイン語を学んでも、身に着けた知識を実践する場を見つけるのは難しいだろう。清泉女子大学スペイン語スペイン文学科では、スペイン語を学ぶ高校生に、日頃の学習の成果を発揮する場を提供し学習に対するモチベーションをさらに高めてもらうため、2020 年より高校生対象スペイン語スピーチコンテストを開催してきた。2019 年に計画をスタートさせ、初のコンテストを 2020 年 3 月に開催しようと準備を進めていたところ、新型コロナウイルス感染が拡大、あらゆる対面イベントが中止を余儀なくされた。そのため本コンテストも予定していた対面形式での開催を変更せざるを得なくなり、スピーチを撮影した動画を投稿するコンテストとして企画を実現した。翌年の第 2 回も引き続き動画投稿形式となったが、第 3 回以降はようやく対面形式が可能となった。ただし、感染を懸念する高校生に配慮し、動画投稿または対面スピーチを選択できるように二つの形式を並行するかたちとなった。5 回目となるコンテストを 2024 年 3 月に開催予定であるが、当該感染症の 5 類感染症移行にともない、今回は対面形式のみとなる。

本発表では、これまでに蓄積された計 4 回のコンテストの記録（応募人数、スピーチのテーマ、応募者・出場者のコメント等）を通して、コンテスト出場に向け努力する高校生の思いや、スピーチを披露する出場者の様子を紹介する。また、企画から準備、開催を通して見えてきた、スピーチコンテストの効果や課題を報告したい。

小学校におけるスペイン語をとおした複言語教育
—光塩女子学院初等科での取り組み—
La educación plurilingüe a través de español en la escuela primaria
-el enfoque en el Colegio KOEN-

茂木俊浩（光塩女子学院初等科）・西村亜希子（立教大学）・齊藤友理（光塩女子学院初等科他）
Toshihiro MOGI(Colegio KOEN), Akiko NISHIMURA (Rikkyo Univ.), Yuri SAITO (Colegio KOEN,etc)

光塩女子学院は 1931 年にスペインのベリス・メルセス宣教修道女会によって日本の東京に創設された。現在の光塩女子学院は幼稚園から高等学校までの一貫教育校である。

2020 年度に小学校では、新たな学習指導要領が全面施行され、第 5・第 6 学年は教科「外国語」、第 3・第 4 学年で「外国語活動」となった。それにより教科「外国語」は評定で評価される教科となったものの、実際には「英語」である場合が多く、小学校教育においても英語偏重の向きを強くしているように感じる。それは私立である本学院でも同様であるが、スペイン発祥であるという特色も生かして英語に限らない言語や文化を児童に経験させたいと思い、小学校段階でできる様々な活動を模索してきた。具体的にはスペインに関わる活動として清泉女子大学との「スペイン文化交流会」、スペイン大使館・セルバンテス東京訪問、NHK『旅するためのスペイン語』動画投稿、その功績として読売教育賞優秀賞受賞、多文化活動として「世界の教会めぐり」、「世界の遊び」、「世界のお金」、「世界の言語プロジェクト」などが挙げられる。

複言語・複文化主義の立場に立ち、様々な方向から児童に働きかけることで、児童が「自分の好き」や「自分の得意」に気づくきっかけとなればと信じて活動している。茂木の最終目標は「他を受容できる子どもを育てる」「世界平和に資する子どもを育てる」ことである。

茂木は現在、光塩での教員生活に加えて、東京観光ボランティアグループ（TFG: Tokyo Free Guide）でのガイド活動や、日本外国語教育推進機構（JACTFL）で理事として教育関係者をつなげる活動もしている。

光塩における課外スペイン語では伝統的にスペイン人シスターが教え、帰国に伴いスペインのメルセス会で生活経験のある日本人シスターが長年教鞭をとってきた。2020 年度より西村、2023 年度より齊藤がその一端を担うようになり、複言語・複文化主義の視点が取り入れられる。現在 3 年生から 6 年生の有志児童（総勢 130 名程度）に学年ごと年間 13 回～20 回（30 分/回）で開講しており、児童は最長で 4 年間スペイン語を継続的に学ぶことができる。歌や遊びを通して身近なものごとをスペイン語で知る、言えるようになる。「使えるか、使えないか」の判断基準ではなく「好き」を大事にスペイン語で表現できることを子どもたちの達成目標として授業を展開している。

中学年では〈フルーツバスケット〉などでスペイン語の音に触れながら語彙を増やし、高学年では動詞を使い「自分」と「相手」をスペイン語で繋いでいく。また、全学年でスペイン語でも『主の祈り』を唱えられるようにするため、課外スペイン語クラスでも練習し、模範となり全体を牽引している。このように校内では日本語、英語のみならずスペイン語による歌声や案内表示の溢れる環境が実現されており、その影響は課外スペイン語クラスに参加する児童にとどまらない。

1 年生から英語学習を進め、3 年生ではすでに英語が第一の外国語として認識されている中、音やリズム、構造の異なるスペイン語に触れることで子どもながらに出来上がりつつある固定観念を崩す。小学生の知っている世界は小さく情報も限られている中で、「身近」と「遠く」のつながりを示して世界を広げていく。スペイン語を知る、楽しむことで母語と英語だけではない他（多）言語への興味や柔軟性を養う。短期的な成果を求めるのではなく、将来への豊かな土壌づくりをすることに重要性と意義を感じるとともに、更なる継続学習への可能性を模索しながら授業を行っている。

Experiencias en el aula de español como segunda lengua: retos para un docente no japonés

Violetta Brazhnikova Tsybizova (Instituto Cervantes de Tokio)

El sistema laboral de cada país tiene presenta sus peculiaridades. En esta ocasión, vamos a fijar nuestra atención en el sistema educativo de Japón y en la situación actual de los profesores de Español como Lengua Extranjera (ELE) o Lengua Segunda en los centros de secundaria.
En esta presentación se analizarán tales aspectos de trabajo como la motivación del docente, la precariedad laboral y la calidad de trabajo de los profesores de ELE, intrínsecamente relacionada con el aspecto anterior. Como es conocido, y como el profesor Juan Carlos Moyano López mencionó en su artículo *La pasión de la experiencia* ya en 2012, la motivación del docente es un punto crucial para motivar al alumno en el aula. La pasión del profesor está directamente ligada a los resultados positivos del proceso de enseñanza-aprendizaje. No obstante, tal pasión se disminuye por las condiciones laborales: "(…) tenemos a una amplia mayoría de profesores contratados por horas, o por clases, los llamados en japonés "profesor hiyoukin" que se ven obligados a trabajar en varias universidades, (…), para completar así un salario. Muchos de estos profesores (…), tienen que (…) trabajar en dos o más lugares en un mismo día, lo cual implica un desplazamiento que no solo te quita tiempo, sino también energía y motivación (Moyano López, 2012)."
Aunque el profesor Moyano López reflexiona sobre el entorno universitario, algunas de sus opiniones pueden extrapolarse a la enseñanza secundaria. Por ello, consideramos necesaria la reflexión que se ofrece en esta presentación y que examinará las condiciones de trabajo de un profesor a tiempo parcial en un centro de secundaria, con sus puntos positivos y puntos de mejora. También, a través del debate, se buscarán soluciones para dar mayor estabilidad laboral al docente.

Referencias bibliográficas:
Moyano, J.C. (2012). "La pasión de la experiencia", en *Nuevos enfoques en la enseñanza del español en Japón – Concha Moreno y GIDE*. Tokio: Editorial Asahi, pp.37-50

【日本語訳】

外国語としてのスペイン語教育現場での経験：外国人教員の挑戦

ヴィオレッタ・ブラジニコヴァ・ツィビゾヴァ（インスティトゥト・セルバンテス東京）

各国の労働基準制度にはそれぞれの特徴があるが、本発表では、日本の教育制度と中等教育における外国語としてのスペイン語教育（ELE）または第二外国語としてのスペイン語教育に携わる教員たちの現状に注目する。特に、教員のモチベーション、雇用の不安定さ、外国語としてのスペイン語教育に携わる教員の質など、本質的に仕事に関連する側面について分析する。
教員のモチベーションが教室での学習者の意欲を高める上で不可欠であることは、既知のとおりであり、Moyano Lópezが2012年に発表した論文「La pasión de la experiencia (経験の情熱)」でも説明されているように、教師の情熱は教育/学習プロセスの結果に肯定的につながる。しかし、そのような情熱が労働条件によって削がれてしまうことがある。それについてMoyano Lópezは

(...）非常に多くの教員たちが、時間給や授業ごとに雇われる教員、日本語でいうところのいわゆる「非常勤講師」として雇われており、十分な所得を得るために様々な大学で働かざるを得ない状況に置かれている(...）これらの教員の多くは（...）、同じ日に2つ以上の場所で働かなければならず、移動によって、時間だけでなくエネルギーやモチベーションさえも消耗されてしまう。(Moyano López, 2012）

と述べている。これは大学での状況についての考察ではあるものの、部分的に中等教育にも当てはめることができる。そのため、これについて本発表で本発表内でもこれについて考え、さらに、中等教育機関における非常勤講師の労働条件を検証し、その良い点、改善すべき点について考察するとともに、討論を通じて、教員の雇用の安定性を高めるための解決策を模索する。

参考文献
Moyano, J.C. (2012). "La pasión de la experiencia", en Nuevos enfoques en la enseñanza del español en Japón – Concha Moreno y GIDE. Tokio: Editorial Asahi, pp.37-50

Reunión de intercambio de los profesores de bachillerato

高校スペイン語教師の交流会 第１回

10:00 - 10:15　始めの挨拶、企画説明
10:15 - 10:50　グループセッション（１）
　　テーマ「私の授業の成功例」
10:50 - 11:15　グループセッション（２）
　　テーマ「お悩み相談・Q&A」
11:15 - 11:20　休憩
11:20 - 12:05　全体ディスカション
　　テーマ「現場にある課題と教師の会に期待すること」
12:05 - 12:15　終わりの挨拶

申し込みフォームにて
現場で直面している悩みや
他の先生への質問を
募集します！！

高校のスペイン語の先生方へ

高校でスペイン語を教えている教師の多くは
相談・情報共有できる人が周りにおらず
共通となる学習指針や教材がない中で
それぞれの環境に合わせて試行錯誤しながら
授業に取り組まれていると思います。

そこで、そのように孤軍奮闘する
高校のスペイン語の教師が一堂に会し
教師同士のつながりを持てる場を企画します！
同じ状況や悩みを共有する教師同士が
全国から集まり、知り合うことで
高校のスペイン語教師のネットワークづくりの
第一歩となればと考えています。

2024.3.24 (日)
10:00-12:15 @Zoom

言語：日本語
対象：高校でスペイン語を教えている方
（新年度から教え始める方も大歓迎！）

お申し込み方法

右のQRコードから必要事項を
記入の上お申込みください。
後日、Zoom情報をお送りいたします。

※お申し込み期限：2024年3月17日(日)

お問い合わせ先：spanish.hs.teachers@gmail.com

シンポジウム

「スペイン語教育における高大接続の現状と未来」

"La situación actual y el futuro de la enseñanza del español.
Su continuidad entre Institutos y Universidades"

開催日:2024 **年** 3 **月** 3 **日**(**日**)

開催場所:**昭和女子大学** 8 **号館オーロラホール**

主催: **昭和女子大学国際学部国際学科**

Patrocinado por: Universidad Femenina de Showa,
Dept. de Estudios Internacionales

共催: **慶應** SFC **スペイン語・スペイン語圏研究室**

Copatrocinado por: Universidad de Keio en Shonan-Fujisawa
(SFC), Dept. del español y el mundo hispano

共催: **清泉女子大学スペイン語・スペイン文学科**

Copatrocinado por: Universidad Seisen, Dept. de Lengua
y Literatura Españolas

本研究は JSPS **科研費** JP21K00791 **の助成を受けたものです。**

（おぐら　まゆこ　　国際学科）
（たかばたけ　りえ　　慶應義塾大学総合政策学部）
（ふじた　まもる　　慶應義塾大学環境情報学部）
（ガルシア，カルメン　　慶應義塾大学総合政策学部）
（プリエト，マリア　ベロニカ　　慶應義塾大学総合政策学部）